

# ジェーン・ハーシュフィールド——詩の「窓」を通して

高橋 綾子

## はじめに

ジェーン・ハーシュフィールド(1956~)は、大学時代に日本の宮廷文学を専攻、日本文学研究を深めるためタサハラ禅センター(曹洞宗の僧院)で8年間禅の修行に打ちこみ、その後小野小町と和泉式部の詩歌の翻訳を行うなど、これらの背景により彼女の詩のスタイルが形成されている。つまり、彼女の詩のスタイルはイマジスト詩人以後ケネス・レクスロスからゲリー・スナイダーへと続いてきた東洋の文学に関心をもった詩人たちの系譜にある。ハーシュフィールドは、松尾芭蕉とマリアン・ムーアの代表作品に蛙が登場することに触れ、他者への共感やヴィジョンが詩によってもたらされることに言及する。このシンポジウムのテーマ、女性詩人の立場については触れると、43世紀に渡る女性詩人の詩のアンソロジー、*Women in Praise of the Sacred: 43 Centuries of Spiritual Poetry by Women* において、彼女は「神聖なものに係る経験は、これまで女性より男性に多かったのではなく、ほんの最近まで社会的な要因で大部分が女性よりも男性を励まし、彼らを記録していた。」(Hirshfield, 1995: xix)とし、エミリー・ディキンソンがアマーストで限られた友人や親せきの者との関わりを持ちながらも孤立した生活を送っていたことや、アン・ブッラドストリートが妻として母として献身的な生活を送ってきたことに言及をしている。この言及の理由は、女性詩人がこれまでのアメリカ社会において、男性に比べ社会的な機会均等に恵まれなかった時代、つまり、社会的不正義を事実上容認してきた時代を知らしめるためである。彼女は、アメリカにおける女性運動後に作家としての活動を行ってきており、現代アメリカ女性詩人としてのハーシュフィールドの責務を感じざるを得ない。

さて、詩論 *Ten Windows: How Great Poems Transformed the World* の趣旨を概略する。彼女は、前作のエッセー集、*Nine Gates: Entering the Mind of Poetry* 以来「詩がどのように機能するか」という疑問に基づき継続的に現代詩研究を行っている。例えば、アメリカの詩の歴史を踏まえ、松尾芭蕉、ヘンリー・D・ソロー、エミリー・ディキンソン、チェスワフ・ミウオシュなどを取り上げながら自身の詩論を展開するが、本エッセー集の論点は、詩の「窓」となっている。本エッセー集では、詩へのアプローチが以下10の章立て、ジェラード・マンリ・ホプキンス、イメージの詩学、芭蕉と俳句のイメージ、詩と隠し、詩と不確実性、「窓」精読、詩と驚きの星座、アメリカらしさ、詩と変化、詩と逆説である。本エッセー集の中心課題の詩の「窓」に関する言及は、主に第8章である。本発表では、第8章を中心に、詩における「窓」をとらえ、詩の「窓」が詩の中でどのように機能してきたか、最後に、ハーシュフィールド詩の実践から詩の「窓」がどのように機能するか、最後に大洋を越える詩人の考察をすることとする。

## ハーシュフィールドの詩における詩の「窓」、deep image

まず、ハーシュフィールドは、「多くのよい詩にはその中に窓の瞬間と呼べるものがあり、視点を変化させ、突然意味と感情の幅広い風景を切り開く。このような瞬間に出会うと、光、香り、音のあらゆる物理的な窓の増大と同じような急激な知覚の可能な新たな融合性を吸い込む。この動きは、持ち上げるような、留め金が外されたような、解放されたようなもので、心と注意力は、新視界へと移動する。」(Hirshfield, 2015: 151)と定義し、さらに、「窓は感覚の領域の変化や修辭的な戦略の転換によってもたらされ、文法や道徳的な立場の転化で形成され、明らかな叙述によって開け放たれ、ほとんど見えないものの中に刷り込む。」(Hirshfield, 2015: 153)とする。ロバート・ブライによれば、「詩人の仕事とは、その眠っている外側の人間を呼び覚まして、外と内、その二つのリアリティのつながりを知覚させることである」と述べており(金関 162)、ハーシュフィールドの詩の「窓」に類似する詩の機能であろう。詩の革命を成したグループとしてビート詩人たちの業績が言及されているが、ビート詩人たちの中には東洋の文化、とりわけ禅仏教にひきつけられ、俳句からインスピレーションを得ていた者もいた。日本文学者のハルオ・シラネによると、1970年代初頭のアメリカの「カウンター・カルチャー」の時代に、想像上の日本を体現する人物として松尾芭蕉により、アメリカ文学における超絶主義者である、ソローやエマソンと類似した隠遁者としてのイメージが再来した(シラネ 12)。荒木田守武の俳句「落花枝にかへると見れば胡蝶かな」とエズラ・パウンドの「地下鉄の駅にて」の出会いから半世紀を経たカウンター・カルチャーの時代において、R.H.ブライスの翻訳を始めとする芭蕉の翻訳がアメリカ詩の変革に再び関わった。つまり、ブライを中心とする新しい詩のグループ deep image である。ハーシュフィールド自身も deep image の詩の実践者である。彼女は2009年に日本に来た際の講演録に、芭蕉の「鐘消て花の香は撞く夕哉」に関して言及し、「鐘の音と夕暮れ、花の香りと時間は心の絵として描かれ、連続とか因果関係がないように配置している。」「俳句の知覚は、他の方向にも進むことができます。すでに心に現れる思考、感情、状況は、外の景色や事物や音に置き換えられることにより、冷やされ、温められ、ずぶぬれにされます。」と解釈を述べ(Hirshfield, 2011: 69)、後に、芭蕉は内なる覚醒(internal awareness)と外なる(external)覚醒の両方をもたらすと加筆している。(Hirshfield, 2015: 90)夕方に鐘が鳴る、花の香りという客観的な知覚があり、聴覚と嗅覚の感覚の混交を生じさせることにより、嗅覚「花の香」

を「撞く」聴覚を重ねて表現する。感覚の混交により客観的な知覚が心のなかで新たな発見をうむと言えるであろう。

ハーシュフィールドにとって、ホイットマン、ディキンソン、芭蕉はアメリカ詩の歴史上重要な詩人たちであり、彼女の詩的想像力において地理的な隔絶はなく、つまり、アメリカと非アメリカを区別なく受容しており、特にディキンソンと芭蕉については、「心と世界の信じがたいほど広く、多様で、正確な領域を横断する。二人は観察の事実の観察に対する想念を試し、経験と言語の双方を革新、広げ、強調する」(Hirshfield, 2015: 88)と述べている。ハーシュフィールドの詩の“Narrowness”(「偏狭さ」)をとりあげ、音節および文法の変化によって「詩の窓」があらわれ、ただ単に猫の情景の描写だけでなく、感情の理解つまり、「他者を完全にわかることはどうやってもできない」ことに気づかされる瞬間、Window-momentを論じた。次に、deep imageに関わる詩“Green Striped Melon”(「緑色の縞のメロン」)についてとりあげた。

They lie  
under stars in a field.  
They lie under rain in a field.  
Under sun.

Some people  
are like this as well—  
like a painting  
hidden beneath another painting.

An unexpected weight  
the sign of their ripeness. (Hirshfield, 2012: 57)

口語の自由詩、第一スタンザ、2, 6, 7, 3シラブル、第二2, 5, 3, 8シラブル、第三5, 6シラブルで形成される短詩である。メロンの蔓が伸びて成長していく様子、それから機知をえた絵画が描かれる。オランダの画家ブリュゲルの絵画をイメージしたが、この絵画に限定していない<sup>1</sup>。また新しいキャンバスを購入するのが困難な画家が、もうすでに描かれているキャンバスを安価で購入することがあり、名画を分析したときに下に別のスケッチが隠れていることがあることに着想を得ている。この詩におけるメロンの蔓は、加賀の千代尼の「朝顔に釣瓶とられてもらひ水」、つまり、朝起きて柄杓朝顔の蔓がからみついでいて、その命を尊び、蔓を切らず、近所からもらい水をした句を想起させる。短詩の中で、メロンの蔓、絵画、キャンバスの重なり、千代尼の句といった重層的なイメージが特徴である。最後の「予期せぬ重み、成熟のあかし」は突然出会った命が踴れている。別の絵画の下に隠れている、つまり、「隠される」、「さらされる」が詩の「窓」を構築し<sup>2</sup>、隠されている在り様が「命の営み」である。詩の窓を通して見た、「命」の詩とも言えるだろう。

### おわりに

大洋を越える詩人、ジェーン・ハーシュフィールドは、ヨーロッパ文学およびアメリカ詩の伝統に加、1950年代アメリカで受容された日本の松尾芭蕉の俳句の影響も受け、つまり西洋と東洋の別なく文学的想像力を形成しているだろう。芭蕉の俳句は、ハーシュフィールドにとっても deep image を追求する短詩の模範であり、内なる覚醒、外なる覚醒を促す詩の作用をもつ。本シンポジウムのテーマ「大洋を越える現代詩人」との関連では、ハーシュフィールドの宮廷文学と松尾芭蕉の作品への傾倒から、当初、環太平洋的想像力を研究成果として想定したが、考察を進めた結果、異なる結論となった。つまり、彼女の作品は、東洋と西洋の別なくハイブリットな気質と女性差別という社会正義の代弁を特質としながら、ディキンソンと芭蕉から学んだ詩的技法に加え、アメリカ詩の変革運動を継承しながら未来へと架橋する詩的想像力によって生み出されているだろう。

<sup>1</sup> Hirshfield, Jane. Personal interview. December 17, 2010.

<sup>2</sup> Hirshfield, Jane. Personal interview. April 29, 2019.

### Works Cited

Hirshfield, Jane. *Women in Praise of the Sacred: 43 Centuries of Spiritual Poetry by Women*. New York:

Harper Perennial, 1995.

———. *Seeing Through Words: Matsuo Basho, An Introduction*. 『ジェーン・ハーシュフィールド 詩の朗読会とワークショップ』高橋綾子 長岡技術科学大学語学センター 2011年。

———. *Come, Thief. Northumberland: Bloodaxe*, 2012.

———. *Ten Windows How Great Poems Transform the World*. New York: Knopf, 2015.

金関寿夫 「無意識から／からの跳躍」〔あとがき〕『ロバート・ブライ詩集』アメリカ現代詩共同訳詩シリーズ⑤思潮社、1993年。

ハルオ・シラネ 『芭蕉の風景 文化の記憶』Landscape and Cultural Memory: The poetics of Basho、衣笠正晃訳、土川叢書、平成13年。